

審査の結果の要旨

氏名 橋本 鉦市

わが国の高等教育政策の形成についてはいくつかの先駆的な研究があるが、いずれも大まかな政策の方向を対象としたものであり、個々の具体的な施策がどのように形成されているのかを具体的に研究したものはほとんどなかった。本論文は戦後改革から 1990 年代に至るまでの医師養成政策を事例としてその形成過程を、体系的かつ詳細に分析しようとしたものである。

論文は序章、総括を含めて十の章からなっている。序章では、既往の政策研究を概観しつつ、一方において政策課題（イシュー）の立ち上がりとその政策への具体化の経緯、他方において政策形成の場となる社会権力構造（レジーム）とそこでのさまざまな主体（アクター）の行動とその相互作用、という二つの軸を交錯させる分析枠組みを設定している。第 2 章においては分析の背景として、日本における戦前の医師養成と、戦時中の医専増設を概観し、戦後の医師養成の出発点の特質を述べた。第 3 章ではそれと対比してアメリカにおける医師養成制度の形成過程を述べている。

第 4 章から第 8 章は、上述の分析枠組みを用いた戦後改革から 1990 年代に至るまでの変化の分析である。第 4 章では占領期において、戦時期の大量養成による医師過剰と、アメリカにおける 1940 年代の医師養成制度改革という二つのコンテクストの中で、戦後の医師養成制度がいかに構想されたかをあとづけ、さらに続く第 5 章ではそうした構想が、戦後日本の現実の中で変質し、厚生省(当時)、文部省(同)、日本医師会などからなる一つの統制的な体制が形成されていったことを示している。

第 6 章は 1960 年代にはいって、そうした体制がゆらぎ始めたことを象徴するものとして秋田大学医学部創設の経緯をあとづけ、さらに第 7 章では、福祉国家化への流れの中で 1960 年代後半から始まる全国的な国立医大・医学部の新設の動きを詳細に分析している。第 8 章では 1980 年代にはいって一転して医師養成数が抑制にむかった経緯が分析されている。結章では以上の分析を総括し、今後の分析課題を述べている。

以上の分析をつうじて本研究は医師養成政策を事例として、高等教育政策が時代の社会構造と権力の布置構造の中で、いくつかのアクターの交互作用として形成されていること、またそのダイナミックスのあり方自体も変化してきたことを具体的に示した。医師養成以外の分野での政策形成への一般化の可能性、現在の医師養成政策との関連、経済的要因との関係、などについてさらに分析が必要であることが指摘されたが、その出発点として以上の点を実証的に明らかにしたことは高く評価された。このような観点から博士（教育学）の論文として十分な水準に達しているものと認められる。